

平成11年（1999年）に普及所へ配属となってから約20年間普及一筋です。普及という仕事はその時代に応じた農業施策を鑑みつつ、地域農業の課題を自分の足で、目で、肌で感じながら見出していくものと捉えています。そのため、それぞれの普及員で自身の核となるスタイルを築いておられるように思います。では私自身はどうしたら良いのか。経験を重ねることはもとより、目にしたこと、耳にしたことから、これはと感じたことを手帳に書きとめて原点とするようにしているのですが、ここで改めてそれらの言葉を織り交ぜながら、こうありたいと思う普及員像（姿勢）を見つめなおしたいと思います。



1 農家の潜在的な可能性を信じ、思いや能力を引き出すこと

新規採用で入った当初から、年齢も経験も上の農家に何をすればいいのかと途方に暮れる日々でした。そしていつからか、普及員同士のふとした一言や会話の中で、「農家に何かすごいことをしようとするのではない。思いもそれを乗り越える能力も『答え』は農家が持っている。それを引き出して実行出来るように下支えするのが普及員の役割」との考えに行き着き、それを基軸とするようになりました。そしてある時、広島県世良町の6次産業化の発展に尽力された後由美子さんの次の文章に出会い、似通っている部分もあって、自分のスタンスはこれでいいのではないかなと思うようになっていきます。

「地域の人々の共通の目標を成功に導くために彼らの潜在能力を引き出すこと。とにかく現場をよく見て深く掘り下げていくうちに、どう仕組みば上手く動いていくか、必ず方向性が見えてくる」また、潜在的に持っているものをより深く引き出すためには、普及員の方に農家に秘めたる可能性があると思える心を持っていることも大切ではないかと考えています。周りから期待される事によって本人も知らなかった潜在能力が発揮できますし、普及員がその土台になればと考えています。

2 農家の思いに寄り添うこと

その一方で、農家となかなか距離感が縮まらずもどかしいことも多々あります。また、あろうことか実績を出そうと焦って独りよがりな事をしてしまったこともあります。そのような時にいつも思い出す、退職時に後輩に送ってくださったある生活改良普及員の言葉があります。

「農家の思いに寄り添うこと、そうすれば必ずと何をすれば良いのか見えてくるのではないですか？」悩んでいない人などいません。それぞれの思いや悩みに真摯に向きあうことによって、普及が一方向的にならず、農家との距離も縮まり、かつ普及ならではの仕事を生み出すことも出来るのではないかと。迷いや焦りが生じる時、肝に銘じているこの言葉が原点回帰を促し、基本に立ち返らせてくれています。

3 普及の醍醐味とは

それぞれの職業で苦勞を乗り越えた末に見える世界があると思いますが、普及の場合それは農家からたった一言「良かった」の思いを聞くことが出来た瞬間ではないでしょうか。農作業改善であれば「今まで我慢しとったけど楽になった」「やり方変えて早く出来るようになった」、6次化の場合ならば「〇〇〇〇から注文が入った」、「決算書の数字があがった」など。そして一緒に試行錯誤し苦勞したからこそ、達成感も大きく、人との関わりを持つ普及という仕事の醍醐味を感じられる時ではないかと思えます。とは言え、まだまだ自分に足りないところも多々あり、十分なことが出来ているか心もとありません。農家からの良かったとの声が聴かれるよう、さらに地域の農業が良くなるよう、自己研鑽、新しい情報収集、知識、技術の向上を今後も積み重ねていきたいと思っています。

4 最後に

平成30年は普及事業70周年の節目にあたるとともに、平成という年号が最後の年になります。いつの時代も転換期があり、社会の変化に応じて普及のあり方もまた変わっていくものと思います。ですが農家の温かさや真摯な姿に感謝と敬意の念を持ち、先輩方の築いたものを宝とし糧として、農家とともに歩んでいく姿勢は変わらないでいたいと思います。